

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008 年度

課題番号：19520118

研究課題名（和文） ルネサンス期北イタリアの小青銅彫刻の研究

研究課題名（英文） Studies on Renaissance Small Bronzes in Northern Italy

研究代表者

石井 元章

大阪芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：90309162

研究成果の概要：ルネサンス期の北イタリアで制作された小型の青銅彫刻に関する基礎を固める本研究は本年度で終結する。同分野に関する基礎文献および現在までの先行研究論文などの情報はおおかた手に入れることができた。また、欧米の主要美術館および聖堂に収蔵される作品を予定した範囲内でハイ・ビジョンの動画映像と写真に収めることができた。これは今後の研究にとって重要な基礎である。次の研究においてはこれをさまざまな角度から分析したい。2007年10月にヴェネツィア、ジョルジョ・チーニ財団美術史研究所で開催された「ルネサンス期のヴェネツィア、および北イタリアにおける青銅の芸術」と題する国際学会において発表の機会を得たうえで、その学会報告書にイタリア語の論文を掲載することができた。日本語論文については現在、発表の場を模索中である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：ルネサンス、

青銅彫刻

北イタリア

アントニオ・ロンバルド

アンティーコ

マントヴァ

フェルラーラ

ヴェネツィア

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

ルネサンス期に作られた青銅彫刻は、公的な場所に置かれた大型の作品と、王侯貴族の邸宅書斎に置かれた小型のものとは大きく分けることができよう。前者が頻繁に研究対象になってきたのに対し、後者は欧米でもその研究が遅れがちであった。ましてや日本ではこれまで看過されてきたといっても過言ではない。

2006年4月にヴェネツィア、チーニ財団美術史研究所で開催された国際学会「トゥッリオ・ロンバルド ルネサンス期ヴェネツィア文化の中での彫刻家・建築家」の前後に、ヴェネツィア彫刻史に関する多くの研究が輩出し、注文主の人文主義的傾向を強く反映する小型の大理石・青銅彫刻についても1,2点の優れた研究論文が刊行されたがその数はまだ少なかった。

2. 研究の目的

このような背景の下に、本研究ではルネサンス期の小青銅彫刻を特に北イタリア、ヴェネト地方に光を当てて、その文化的機能を検証するための基礎を構築することを目指す。

小規模な青銅彫刻は古代から収集家や知識人の関心の的であったが、ルネサンス期には当代美術と古代との関連を根本的に規定するものとして機能したと考えられる。

もともとルネサンス期の青銅製小型彫刻はフィレンツェに生まれたが、このトスカナの町では、ロスト・ワックスという技法によって1体の像が作られるに止まることがほとんどであった。この技法が、ドナテッロのパドヴァ滞在(1443-54年)によって同市を中心とするヴェネト地方に伝えられると、オリジナルの像が青銅の工房において数多く複製されるようになった。その背景として、ヴ

ェネト地方に多く存在した人文主義的教養を持つ貴族や商人が書斎等に置くために注文を出したという事実を挙げるができる。

しかしながら、個々の青銅像がどのような文脈で制作され、機能したのかは、個別に検討を要する難しい問題である。

本研究の目的は、将来的にこのような彫刻の機能を検証すべく、その研究の基礎を整えることにある。

3. 研究の方法

したがって、まずこの分野の重要な基礎文献である Wilhelm Bode, *The Italian Bronze Statuettes of the Renaissance (trans. Of Die italienischen Bronzestatuetten der Renaissance)*, New York 1980 および Leo Planiscig, *Andrea Riccio*, Wien 1927 を複写で入手し、その上で、重要な先行研究を収集することで、文献研究の基礎を固めることが目指された。

ついで、青銅彫刻が収蔵される教会や美術館を巡ってそれを实地に赴いて調査し、ハイ・ビジョン動画映像と静止画像に収めた。この作業は、各美術館の学芸員に予めコンタクトを取って訪問調査についての詳細を詰め、ヴェネツィアの聖堂に収蔵される作品に関してはヴェネツィア総大司教管区に事前に申請したうえで、2008年2~3月、および翌2009年2~3月に行なった。

これらの作業と平行するように、2007年10月にヴェネツィア、ジョルジョ・チーニ財団美術史研究所で開催された「ルネサンス期のヴェネツィア、および北イタリアにおける青銅の芸術」と題する国際学会における発表を行なう機会を得、その後、学会報告書のためのイタリア語の論文を執筆し刊行した。

4. 研究成果

当該国際学会での発表は順調に行ったが、その報告書の刊行は研究所編集局の都合により予定されたより大幅に遅れ、最終的には2009年5月にまで持ち越された。その間、何度も原稿に手を入れることはできたが、執筆に掛かる時間もその分引き伸ばされることとなった。

一方、予定していた画像・映像の撮影はほぼ全部完了することができた。加えて、現地の学芸員・研究者と強い繋がりを構築し、今後の研究に資する基盤を作ることができたと考える。

以下、撮影調査の順に従ってまとめたDVDの内容を示す。

1. ウィーン美術史美術館（プラニシヒの文献で取り上げられた多くの小青銅作品に関する映像 43点）
2. サン・マルコ広場（ヴェネツィア、旗竿台座浮彫の映像 9点）
3. サント・ステファノ聖堂（ヴェネツィア、13点）、ガッレリア・エステンセ（モデナ、《ゴンザーガの壺》を含む映像 24点）
4. サン・ザッカリア聖堂、サン・リオ聖堂（ヴェネツィア、8点の映像）
5. サン・フランチェスコ・デラ・ヴィーニャ聖堂、サン・マルティーノ聖堂（ヴェネツィア、6点の映像）
6. サン・マルコ大同信会館、サンタ・マリア・デイ・ミラーコリ聖堂（ヴェネツィア、9点の映像）、イル・サント聖堂、大聖堂（パドヴァ、7点の映像）
7. バルジェッロ美術館（フィレンツェ、7点の映像）
8. 市立絵画館、サン・フランチェスコ聖堂、大聖堂（ラヴェンナ、8点の映像）
9. サンタ・マリア・グロリオザ・デイ・フラリ聖堂（ヴェネツィア、8点の映像）
10. サン・マルコ聖堂（ヴェネツィア、ゼン礼拝堂など 19点の映像）
11. サン・マルティーノ聖堂、サン・ジョヴァンニ・クリソストモ聖堂、サンタ・マリア・デイ・ミラーコリ聖堂（ヴェネツィア、25点の映像）
12. サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂 1（ヴェネツィア、14点の映像）
13. セミナーリオ・パトリアルカーレ、サン・ジョッベ聖堂（ヴェネツィア、24点の映像）
14. カ・ヴェンドラミニ・カレルジ（ヴェネツィア、3点の映像）
15. サン・ニコロ聖堂、サン・フランチェスコ聖堂（トレヴィーゾ、4点の映像）
16. サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂 2（ジョヴァンニ・モチェニーゴ記念碑）、ジョルジョ・フランケッティ美術館（ヴェネツィア、スピナリオなど 16点の映像）
17. サン・フランチェスコ聖堂、イル・サント聖堂 2（パドヴァ、復活祭用燭台などの映像 5点）
18. カーポディモンテ美術館（ナポリ、6点の映像）
19. ルーヴル美術館（パリ、4点の映像）
20. ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、ウォレス・コレクション（ロンドン、20点の映像）
21. ナショナル・ギャラリー（ワシントン、25点の映像）
22. メトロポリタン美術館（ニューヨーク、5点の映像）

2007年ウォレンは「ガスパレ・ファントウツィ：ルネサンス期のボローニャにおける彫刻のパトロン」と題する刺激的な論考をバーリントン・マガジン誌に発表し、小型の大理石彫刻2点とパトロンとの関係を明らかにした。また、2008年にはマントヴァで同地のゴンザーガ宮廷で活躍したアンティーコに関する展覧会が、ロンドンとイタリアのトレントでリッチョに関する展覧会が開催された。この二人の青銅彫刻家は本研究が対象とする時代にあってはまさに中心的役割を果たした芸術家達であり、彼らに関する研究が展覧会を機にいっそう深まったことは研究者として喜びに耐えない。

今後は、ウォレンの研究が明らかにしたような個々のパトロンと作品との関係を検証することを目指して、研究を進めたいと考える

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

Motoaki Ishii “La metamorfosi d’ippocampo: l’antico in Antonio Lombardo e in Jacopo Alari Bonacolsi detto l’Antico (海馬の変容：アントニオ・ロンバルドとヤコポ・アラリー＝ボナコルシ、通称アンティーコにおける古代)”, a cura di Victoria Avery e Matteo Ceriana, *L’Industria artistica del bronzo del Rinascimento a Venezia e nell’Italia settentrionale, Atti del Convegno Internazionale di Studi, (23-24 ottobre 2007)* (ルネサンス期ヴェネツィアと北イタリアにおける青銅の芸術、国際学会報告書 2007年10月23 - 24日), 査読有、Verona 2009,

pp.135 -156.

〔学会発表〕(計 1件)

Motoaki Ishii “L’Antico come “moderno”? Ipotesi sul <Trionfo di Eracle> di Antonio Lombardo (現代作家としてのアンティーコ? アントニオ・ロンバルド作《ヘラクレスの凱旋》に関する仮説)”, トゥッリオ・ロンバルド生誕550周年記念国際学会『L’Industria artistica del bronzo del Rinascimento a Venezia e nell’Italia settentrionale (ルネサンス期ヴェネツィアと北イタリアにおける青銅の芸術)』, 2007年10月23,24日、ヴェネツィア、ジョルジョ・チャーニ財団美術史研究所にて開催 (http://www.cini.it/index.php/it/event/detail/2/52/sf_highlight/l+industria+artistica+del+bronzo)

6. 研究組織

(1)研究代表者

石井 元章

大阪芸術大学・芸術学部・教授

90309162